

# 学校教育におけるアイヌ文化学習の実践とその意義

菊 地 達 夫（北海道浅井学園大学短期大学部・北方圏生活福祉研究所）

## 抄 録

本研究では、学校教育におけるアイヌ文化学習の実践をみながら、児童の反応をもとに学習意義を明らかにする。具体的には、アイヌ文化学習の実施状況について、先行研究に依拠しながら整理する。次に、小学校総合的な学習の時間における教育実践を取り上げ、アイヌ文化学習の導入の可能性について考察する。さらに、児童の反応を分析しながら、アイヌ文化学習の意義を浮き彫りしたい。

アイヌ文化学習の実践は、その居住が多い地域で芽生え、それ以降、行政機関（北海道教育委員会・札幌市教育委員会）の後押しがありながらも、なかなか浸透する姿勢がみえない。小学校の教育実践では、指導教諭の熱心な働きかけにより、多様な文化理解のアプローチができることを確認できた。また、それを受講した児童は、4つの観点で良好な評価を下した。

キーワード：学校教育，アイヌ文化学習，総合的な学習の時間，文化理解

## I. はじめに

文化圏は、言語や宗教といった文化要素などによって、類似した文化的特色の分布する地理的空間を指す。それは、人為的な線引きによる国境線とは異なり、交易や紛争などを媒介としながら生じ、かつ流動的でもある。

文化圏は、国民国家の諸政策で大きな影響を被ることが少なくない。世界各地では、近代国家の成立過程において、文化圏を分断したり、特定地域にある民族のみ強制移住したりといった事態がみられた。我が国におけるアイヌ文化も「滅びてゆくもの」と見なされた時代があった。そのため、アイヌ文化は学校教育などで歪めら

れやすい。誤った内容の指導によって、その文化や民族に対する差別意識をもたらしかねない。アイヌ文化の場合、学校教育における指導のあり方が長期にわたり固定的にとらえられ、今日なお改善されていない（平山 2001）。もちろん、学校教育のみが原因と断言できないが、その責任の一端は認めざるをえないだろう。

アイヌ文化学習についての研究報告はほとんどなく、指導者の立場からまとめた平山（2001）の研究が、注目に値する。それは、北海道教職員組合における研修会報告を丹念に調査し、これまでのアイヌ文化学習について整理したものである。

本稿では、学校教育におけるアイヌ文化学習の実施状況を確認した上で、ある小学校の授業実践を取り上げ、児童の感想記述を引用しながら、どのような学習成果を

## 旧教育課程

各教科等を中心とした教育実践 → 教科内容に関わる分野や領域  
(とくに社会科・地理歴史科)



## 現行教育課程

「総合的な学習の時間」の新設 → 教科内容にとらわれない多様な  
分野や領域

第1図 教育課程にみるアイヌ文化導入の可能性  
資料) 各学習指導要領より

得たか探り、アイヌ文化学習の意義を明確にしたい。

まず、平山（2001）の研究成果から時系列にアイヌ文化学習に関する内容を抽出し、さらに若干の関連資料を加味した上で、実施状況をまとめる。次に、数々のアイヌ文化学習を試みた平山教諭の授業実践のうち、総合的な学習の時間（以下、総合学習）の内容を取り上げる。

これまでのアイヌ文化学習は、そのほとんどを社会科で実践してきた。一方、総合学習は、特定の教科に依存しないため、アイヌ文化学習を取り入れる可能性が増すと考えられる。

## II. 学校教育におけるアイヌ文化学習の動き

### 1. 戦後から1970年代まで

戦後、1947年に社会科が登場した。北海道教職員組合の社会科分科会では、アイヌ文化の内容を、暫く取り上げることはなかった。他方、アイヌ民族が多く居住する地域（胆振・日高）では、精力的な教師による単発的な授業として、社会科で取り上げる実践がみられた。また、別の視点として、人権問題（差別問題）や学業不振といったアイヌ民族に対する諸問題も報告された。

1960年代に入っても、依然、社会科分科会でアイヌ文化やアイヌ史を議論するような場面はなかった。

1969年、胆振地区からの報告で、郷土学習の一環とするアイヌ文化学習の授業実践が紹介された。取り上げた学年教科は、小学校3・5年社会科、4年国語科である。とりわけ、アイヌ観光（5年社会科）を教材とした点は、新たな試みとして評価された。平山（2001）によると、これらの授業実践は、開拓以前の歴史や開拓後のアイヌ民族の変容について、不十分であったと指摘する。

続く、1971年に同じく胆振地区からの報告で、アイヌの伝承、生活、前近代アイヌ史、差別問題を題材とする授業実践が紹介された。平山（2001）によると、この授業実践は、これまでの内容とは違う画期的なものと評価しながら、現在の指導内容とは大きく相違するものであると指摘する。加えて、アイヌ文化学習の取り組みは、正しい文化理解につながる可能性が高いことを強調した。

1975年に入り、ようやく社会科分科会でアイヌ文化を取り上げることとなり、共通課題として認識された。翌年（1976年）には、北海道歴史教育協議会においてアイヌ民族の教育をテーマとした最初の書物が刊行した<sup>1)</sup>。1978年、中学校社会の検定教科書では、アイヌ史を初めて取り上げた。しかしながら、これは本文記載ではなく囲い込み記事による掲載に留まった。平山（2001）によ

ると、当時の教科書内容は、史料による事実認識を欠いたものであると、批判している。

1970年代、アイヌ史を副読本に記載するという動きも、各分科会（人権と民族分科会や社会科分科会）で議論され始めた。平山（2001）によると、副読本編集の難しさを指摘しつつ、アイヌ文化学習を取り上げる機会が増した点を評価している。

### 2. 1980年代以降

1982年以降、アイヌ文化学習は、行政機関（北海道教育委員会・札幌市教育委員会）の関与により、急速に環境整備が進められた。まず、札幌市教育委員会は、1982年よりアイヌ民族に関する研修会を年2回実施するようになった。1985年以降、義務教育機関向けとして「アイヌ民族に関する指導資料」を作成し、1994年までシリーズ4冊を発行し続けた。

北海道教育委員会は、1983年のアイヌ教育研究協議会経過報告をもとに、「アイヌの歴史・文化に関する指導の手引き」学校教育指導資料（小中向け）を1984年に作成した。平山（2001）によると、この指導資料には、内容の誤りが多々あることを指摘している。例えば、アイヌかんじょうは、史料で確認する限り、そのような数え方をしたという証拠はないと強調する。同手引き書は、すでに普及している副読本の用語記述についての批判対策でしかなかったと指摘する。

1990年代に入ると、高等学校の指導資料（1992年）も普及し始めた。また、社会科教科書では、アイヌ民族の先住民族記述が一般化した<sup>2)</sup>。しかしながら、中央政府は、一貫としてその記述の正当性には触れず、あくまで出版会社の自己判断による記載であると強調する。他方、文部科学省は、現行課程（2002年）より始まった総合学習で、アイヌ文化（言語）学習の導入が可能であると示唆した<sup>3)</sup>。また、道内の高等学校では、単なる授業実践のほかに、クラブ活動（郷土研究部）の取り組みにも注目が集まるようになった<sup>4)</sup>。さらに、平取町の社会科教員は、日々の実践に裏打ちされた共同研究により、小中学校全体におよぶアイヌ文化学習の教育課程を作った。

このようにアイヌ文化学習の取り組みを普及させようとする一方で、道内市町村の約30%で、副読本にアイヌ文化・民族の記載を全く盛り込まない事実も確認された（吉田 1999）。道外の教育資料をみれば、依然、誤った内容の記述が掲載されており、まだまだ課題が多い<sup>5)</sup>。

以上、アイヌ文化学習の取り組みは、指導資料の普及など、授業環境をようやく整備した段階にある。指導資料を活用して、どの程度の授業実践を行っているかは不

明である。普及したはずの指導資料も、現場教師の目に触れているか分からない。

### Ⅲ. アイヌ文化学習の実践（平山教諭実践）

#### 1. 授業実践の過程

授業実践は、上川アイヌ式における食生活を題材とした。具体的には、オオウバユリからでんぷんなどを作るという試みを総合学習で行った。

オオウバユリの採取からでんぷん調理まで、約1週間をかけた。実践にあたり、外部からの専門家を招き、6年の担任が道具を、5年の担任（平山教諭）が指導書を作成した。対象は、5・6年の児童で行った。

それでは、授業実践の流れをみていきたい。まず、採掘道具、ウス・キネ、バケツ、角材、ざる（日本手ぬぐい）を用意した。採掘道具は、通常、トゥレプタニと呼ばれる棒で、先をヘラのように60cmくらい削ったものを使用する。アイヌ民族は、採取場所で適当な枝を見つけて、使用後にその場に残していったと言われる。授業では、移植ゴテ、スコップ、ナイフで代用した。ざるは、本来、細かな米あげざるが理想であるが、日本手ぬぐいを用いた。

採取場所は、オオウバユリが自生している学校周辺である。採取時期は、上川アイヌ式の7月を模倣し、低緯度に位置する小樽の場所を考慮し、6月末に行った。

採取前、アイヌ文化にならいカムイノミ（オオウバユリの神への感謝）を行う。次にオオウバユリの根を掘りおこす。採取は開花していない雌しべのみを中心とする。根は、茎を10～15cm残して、葉の部分の切った後取る。根をほぐし水洗いを念入りにする。とりわけ、根に付いている不純物を取り除く。ほぐした根は、ねばりけが出るまで、ウスとキネでつぶす。その後、日本手ぬぐいで作った袋を使い、水を入れ何度もこす。同時に大きめのタルを用意し、水を入れる。ここまですが初日の作業となり、事後に感想記述を書かせた。

日本手ぬぐいの残物は、バケツなどの容器に入れ、薄い和紙をかぶせ縛る。風通しのよい日陰に置いて発酵させる。数日経って、上部が黄色に変わったら取り出し、広げて穴をあけドーナツ型にして乾燥させる。発酵から1週間経つと繊維質のものは、保存食となる。

他方、タルの中のものは、1日5回くらいの割合で3日目までかき混ぜ、透明になるまで続ける。その後3日間過ぎると、下部にでんぷんが沈殿し、二つの層が出来上がる。下層は、白色のきめ細やかな一番粉として、薬剤（下痢止め）に使われるほか、おかゆを作って食することもできる。上層は、灰色できめが粗い二番粉とし

て、主として団子の材料に使う。授業としては、諸般の事情により食する前までのところで終えた。

以上、授業の流れをみてきたが、いくつか特筆できる点がある。第1に、身近に自生する植物を用いたことである。平山教諭も指摘するように、授業のきっかけは、オオウバユリの自生を発見していたことが大きい。これは、生活科、社会科、理科の教材研究として、日頃より関心を向けていなければ、気づけない。第2に、単なる植物からでんぷんを作るといった活動ではなく、アイヌ文化の特色を理解できるような配慮に努めたことである。例えば、カムイノミの行為は、アイヌ文化における自然と共生といった考え方を理解しやすい。第3に、総合学習というねらいを十分活用し、生産活動を具体化した点である。食料品を簡単に手に入れることができる現代社会において、採取、加工、消費といった一連の活動体験は、食料品の貴重さについて一考を加えることができよう。

一方、取り組む上での諸問題も浮き彫りとなった。アイヌ文化指導資料の普及した現在でも、現場教育の考え方は改善されたと言い難い。平山教諭によると、実施にあたり教育課程や教科内容についての位置付けを求めるなど、アイヌ文化学習の実践には、まだまだ抵抗感が大きいと指摘する。総合学習の導入で、新しい取り組みに幾分寛容になったとは言え、現場教育での受け止め方には差異がある。また、野外活動や体験を伴うものは、児童の管理といった諸問題を指摘するばかりで、積極的な実施を支援する体制には成っていない。結局、精力的な教師による実践によって細々と行われている。

#### 2. 児童の反応

さて、平山教諭のアイヌ文化学習の実践は、児童にどのように評価されたのであろうか。ここでは、児童の感想記述を分析し、学習内容をどのように評価したか具体化する。

感想記述を分類すると、大きく4つに区分できる。それらは、総合学習に対する評価、教員に対する評価、アイヌ文化に対する評価、体験活動に対する評価である。以下では、いくつかの感想記述を提示しながら、分類した評価について考察する。

総合学習に対する評価は、少数意見となった。

自分が思っていたより自然のルールはむずかしいことがよくわかった。総合学習の勉強はいろいろなことがわかって楽しい。(事例1)

事例1は、総合学習のもつ発展性を評価している。これまでの教科教育の内容では理解できない新しい発見に

つながったことを指摘している。これは、総合学習を実践する上で大きな支えとなり、教師の積極的な取り組みを後押しする。

2つ目の教員に対する評価も、少数意見となった。

平山先生が社会が好きだから今回のことができたと思う。ちょっと前までは社会がきらいだったけど、今は社会が好きです。だから今回みたいにアイヌのこととかに関係のあることがまたやりたいです。今回はほんとに楽しかったです。(事例2)

事例2は、普段からの社会科授業での熱心さが、児童の意欲に変化を与えたことが理解できる。そのため、社会科との関連が強い総合学習の取り組みは、高い評価につながった。すなわち、教員の取り組む姿勢があって結びついた結果と言える。

3つ目は、アイヌ文化に対する評価で、いくつかの意見を得た。

料理をおしえてくれた先生もきて、ほんかくてきにやった。また、一つアイヌぶんかをしてよかった。でんぶん作りはたいへんな仕事だとじっかんしました。(事例3)

つく時(ウス)、歌をうたってやったところがアイヌ人みたいだった。(事例4)

事例3は、これまでのアイヌ文化学習に続く知見を得た継続性を評価している。また、事例4は、作業過程において、出来る限りのアイヌ文化を導入したことで、文化理解の幅を広げた。単なる、つくという作業からでは決して得ることができなかった評価と言える。

これまでのアイヌ文化学習は、社会科授業の一環とする展開が中心であったため、実践内容が限られた。他方、体験的学習を取り入れた総合学習では、多様なアイヌ文化理解の可能性が増した。

4つ目は、体験活動に対する評価で、最も意見が多い。

今、のうやくとかもんだいになっているけど、オオウバユリは自然の物をつかっているから体にいいと思います。つくるのも楽しかったです。(事例5)

私はこの勉強をして食べ物を作ることがこんなに大変なことを初めて知りました。作る前は、かんたんそうだと思ったけど、けっこう大変なことが分かりました。今度、またやってみたいです。(事例6)

事例5は、生産過程を体験することで、初めて得られた評価と言える。日本国民は、健康ブームにより食料品の原材料に対して幾分関心を向けるようになったが、生産過程にまでにはなかなか向かない。単なる知識の注入とは違い、体験することで得られた知見は、学習効果を増しやすい。事例6は、採取・加工をするという生産活動の体験を経て、その厳しさを体感できたことを強調している。事例5や6は、体験活動の成果でしか得ることはできない。

#### IV. おわりに

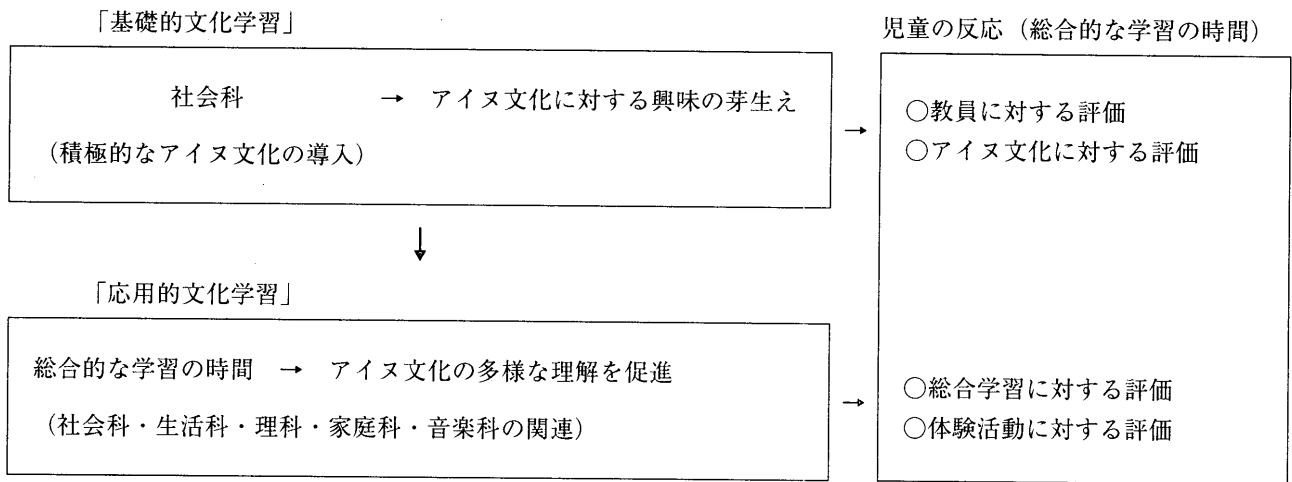
本稿では、既研究成果を中心にアイヌ文化学習の流れを再確認し、小学校における授業実践を取り上げた。また、その学習成果の児童反応についても、検討を加え、以下のような知見を得られた。

行政機関は、1990年前半までに授業実践を促進するため、指導資料の普及を行った。他方、アイヌ文化学習は、いくつかの実践報告を得られるようになったが、急速に増加したところまで達していない。副読本をみれば、依然アイヌ民族に関する記述が盛り込まれていない自治体も散見する。

事例としたアイヌ文化学習は、身近な地域資源を活用したこと、随所にアイヌ文化を意識した取り組みをしたこと、生産活動のプロセスを踏んだことを特筆できる。とりわけ、後者2つは、総合学習の導入によって、初めて取り組みが可能となった。同時に、アイヌ文化学習は、統合的または横断的な学習活動として成り立つことを改めて確認できた。

児童は、4つの視点からアイヌ文化学習を評価した。細かくみると、概ね体験活動に対する評価に意見が集中し、その他の評価は数としては少ない。また、教員に対する評価とアイヌ文化に対する評価は、日頃の社会科授業での積み重ねによる延長上としての評価と解釈できる。それに対して、総合学習に対する評価と体験活動に対する評価は、学習活動の変化による評価と解釈できる。

アイヌ文化学習の積み重ねは、正しい文化理解を促進し、差別意識の払拭に大きな役割を果たすと考えられる。このような実践が、総合学習や社会科を中心に、小中高校で広く普及することを期待したい。



第2図 事例教育実践の学習効果の構造  
資料) 児童感想文

## 付 記

本稿作成にあたり、小樽市立手宮小学校教諭平山裕人氏には、資料提供をはじめ数々の有益な助言を賜った。

## 注

- 1) 1976年、北海道歴史教育協議会は、アイヌ民族の教育をテーマにした最初の本『アイヌオロッコの問題と教育』を出版した。
- 2) 1995年、小学校社会の教科書改訂版5社で「先住民族」として記載し、1994年にも高校教科書で「先住民族」を記載している。
- 3) 1996年、中教審にて会長有馬氏が総合学習でアイヌ語集中授業の可能性を示唆している。
- 4) 1996年、高校の部活（郷土研究部）で、旭川龍谷が「上川アイヌの研究・笹ぶき屋根住居の特徴」を発表、美唄南が「基本的人権とアイヌ差別」を発表した。とりわけ、旭川龍谷の郷土研究部は、長年にわたりアイヌ文化に関する研究を蓄積している。
- 5) 例えば、1995年、京都における修学旅行資料で不適切な表現や誤りが見つかっている。

## 文 献

- 菊地達夫（2002）：アイヌ民族における生活福祉の動態と空間構造，北方圏生活福祉研究所年報第9号，pp. 1-10
- 篠原行雄（1997a）：アイヌ民族北海道新聞記事資料集 NO4，北海道池田高等学校
- 篠原行雄（1997b）：アイヌ民族北海道新聞記事資料集 NO5，北海道池田高等学校

- 田端宏・桑原真人ほか（2000）：『アイヌ民族の歴史と文化』，山川出版社
- 平山裕人（2000）：『アイヌの学習にチャレンジ』，北海道出版企画センター
- 吉田正生（1999）：道内社会科副読本（平成9年度）におけるアイヌ民族記述について，僻地教育研究第53号，pp. 53-66

# The Meaning of the Practise and Study of Ainu Culture in School Education

Tatsuo Kikuchi    Northern Region Research Center for Human Service Studies

## Abstract

This research examines the practise and study of Ainu culture in school education, based on the reactions of children who participated in the studies. In particular, regarding the actual conditions of Ainu culture studies, the research is arranged centring on the preceding research. Next, this research shall examine the possibility of introducing Ainu culture studies into the education practise of primary school general education. In addition, while analysing the children's reactions, this study would like to highlight the meaning of Ainu culture studies.

The practise of Ainu culture studies begins in areas where Ainu residence can be certified. After that, even if there is encouragement from an administrative agency, there are not really any signs that the studies settle in. It has been shown that, in primary school education practise, if the introducing teacher perform enthusiastic work, one can make an approach towards cultural understanding. Also, the children who receive the instruction received good marks on 4 viewpoint standards.

Keywords : school education, Ainu culture studies, general education, understanding culture